

「先生のがっこう」第4回 あまんきみこさんと対談

1月13日(土)、堺・泉北・泉大津教組が共催する「先生のがっこう」の第4回講座が開かれました。今回の講師は小学校国語の教科書にも掲載されている「ちいちゃんのかげおくり」「白いぼうし」等の作者、あまんきみこさんです。青年教職員との対談を通して、あまんさんの経験から来る戦争への思いや、子どもたちに伝えたい思いを知ることができました。

満州で体験した教育の転回

あまんさんは女学校(中学校)2年生の時に、旧満州の大連で終戦を迎えました。



終戦直後はソ連軍の進駐により混乱した状況でしたが、数ヶ月後にはその状況も収まり、学校も再開されました。

しかし、学校で先生が言うことは、戦時中と180度変わったものになっていました。それまで教えられてきたことと正反対のことを言うので、あまんさんは学校の先生や大人を信じられなくなり図書室に籠もるようになったそうです。ただ、そんな中で変わらないう先生に救われたと言います。その方はあまり政治的なことは言わない国語の先生で、詩や文学について静かに授業されていました。あまんさんはその先生の姿に「変わらぬものもあるんだ」と分かり、

ほっとしたそうです。この話を聞いて、私たち教職員が子どもに与える影響の大きさ、教育というものの責任の重さを改めて感じました。決して戦争に向かう教育をしてはならないと強く感じたエピソードでした。

子どもへの愛情と深い理解

あまんさんは終戦後の混乱の中、ソ連兵が家に入り込み、母や叔母と一緒に天井裏へ隠れるという体験をしています。しかし、不思議と怖くはなかったそうです。その時を振り返り、「子どもってね、知らない人の中で一人であることが一番怖い。お店で親とはぐれた子どもは泣いちやうでしょう。でも大切な大人と一緒にいるときはちっとも怖くないのよ」という言葉が印象的でした。ちいちゃんが一人ぼっちになり、たくさんの人たちの中で眠った夜を思い出させる言葉でした。

る言葉でした。

また、ご自身が母になって気づいたエピソードも語られました。毎晩子どもに即興でお話を作って聞かせていたのですが、お子さんは前に聞いた話と同じものを聞きたがる。ところがあまんさんは即興で作ったものですから、どうしても細部が違ってしまいます。すると子どもが「違うよ、こうだったよ」と指摘するそうです。その様子を見てあまんさんは、「子どもって同じものの繰り返しが好きなんだ」と気づいたそうです。こうしてお話から、あまんさんの作品や子どもへの理解を深めることができました。

戦争を知らない子どもたちへ

青年教職員からは、「戦争を知らない世代の私たちが、子どもたちに『ちいちゃんのかげおくり』をどう教えればいいのか悩みます」という思いをあまんさんに伝えました。あまんさんは、「今の子どもたちに、あの悲惨な戦争の全部を知ってほしいとは思わない」と語りました。



「ただ、このお話を読んで、戦争がどういふものかを少しでも感じてくれたらそれだけでいい」「心の片隅に、戦争ってこんなに怖くて、悲しくて、つらいものなんだということが少しでも残るなら、それだけでいいんです」と話してくれました。

あまんきみこさんの童話は戦争の話でないものも数多くありますが、その原点はやはり幼い頃に過ごした旧満州での体験があるようです。今回の対談は「教え子を再び戦場に送らない」という私たちの決意を、より強くさせてくれました。

泉北教組に加入して子どもと教育を守ろう！